

芥川だより

発行日 * 2023年5月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

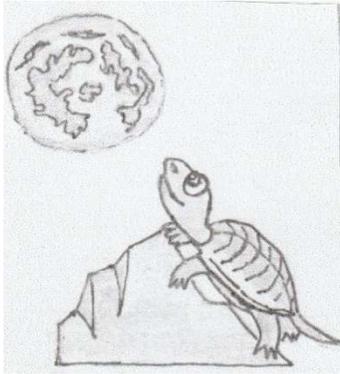
発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部 200円です *****



えっ、肝臓がん？

先月の定期健診で「肝臓をエコーで見させてください」と担当医から言われて「ああ、いいですよ」と軽く返事した。阪大病院から13年も診てもらっているので友達みたいな関係だ。

後日、検査結果の画像を見ながら「がんの疑いがあります、消化器内科の専門家に診てもらいましょう」と言いながらPCのキーをたたくが予約が一杯で今日は無理です。1週間後に予約を取りました」仕方がないから、予約日に消化器内科へ行く」と簡単な問診を受けた後「1週間後に造影剤を飲んでCTを受けてください」「CT

の検査解析には1週間ほどかかりますから、2週間後に来てください。

私の暴飲暴食を考えれば、肝臓がんになっても不思議ではない。田舎の同級生はタバコの吸い過ぎで肺がんになり数ヶ月前に亡くなった。相当なヘビースモーカーだったみたいだ。私も似たようなもんだが、煙草も1年前にやめたが、肺は真っ黒だろう。

ガンの疑いをかけられ、内心では「待ってました！」という気分があった。ガン保険にも入っているし、生命保険の手術・入院給付金を合わせれば相当な金額だ。運よく死ねばさらに死亡給付金がもらえる。家内の強い保険依存で無理してかけてきたから、一気に回収できる。まあ、死んだ後の事はどうでもいいけど。本当に多額の保険金を払ってきた。途中で払えきれずに半分ほど解約したが、それでも払い済の終身のが何本かある。

いよいよ、審判の日が来た。五分五分の可能性だと聞いていたから、ガンで一年ほどゆっくり養生するのも悪くはない。と期待と不安を抱えて診察室に入った。担当医は単刀直入に「ガンの可能性はありません」CT画像解析の医師のコメントも同じだった。なんや、ガンやないんか、馬券か宝くじが外れたような落胆した気分が湧いてきた。先生には、丁寧にお礼をいって帰った。「元気なんやから、根性入れて働け！」と天の声がした。

死をめぐるあれやこれ(102)

石川 吾郎

二つの邸宅

新緑に誘われて、連休中京都市でも人出の少ない場所を求めて一日散策をした。疎水の近くで、有名な建築家ヴォーリズ設計になる遺伝学者・駒井卓旧邸に行き会った。古びているが瀟洒な二階建ての洋館だ。来館者は他にいなかった。ヴォランテイアの方にたつぷり解説していただいた。家の各所にちりばめられた斬新なデザインに惹かれた。またキツチンが実によく考えられ、使いやすそうだった。奥さんを中心に大事に作られたことだった。それで、昔訪れた奈良・春日大社の馬酔木の森を抜けた高畑町の志賀直哉旧邸を思い出した。ここも奥さんの居心地を中心に考えられていると教えられた。主人の書斎はいずれも北側のすみだった。◆両邸にはともにサンルームがあり、志賀邸は庭の芝生に接続して広々としており、駒井邸は二階に大文字山と比叡山と庭の緑を望むことができて、ロッキングチェアに座っていつまでもまったりしたいとつくづく思った。◆この両邸は、とくに奥さんの生活を中心に考えられていることが共通している。そういえば昔、志賀邸を訪れた際に、案内の方が、家を新築される際には建築家さんとまた見にこられるといいですよ、と言われたのを思い出した。しかしそれはなかなか贅沢なことだ。

素老人☆よもだ帳 (110)

坂本 一光

◆追悼の言葉、いまひとつ

二〇一四年十二月二十一日、京都大学時計台の下にあるホールで『藤永太一郎先生お別れ会』があった。同年六月に九十五歳で逝った恩師を偲び、理学部分析化学研究室同窓の者たちが集まった。恩師という言葉は今どき死語かもしれないが、先生は素老人にとつて、「偶然が必然になる」ことを実感させてくれた先生であった。それはどういふことであるか、そのとき私が述べた弔辞のようなあいさつを紹介したい。

昭和四十七年に藤永研究室を卒業した坂本一光です。先生とお別れする時を迎えて、私は人と人との出会いの偶然と必然について考えてしまいました。

傲慢な話ですが、四十三年前の昭和四十六年四月、自分が卒業研究をやつていけそうな研究室は他にないと藤永研究室の門をたたいてみると、本当に思いもかけず、そこに大きな、私の一生をおそらく縛ることになった藤永太一郎先生がいました。

しかし研究については、私は先生の志の万分の一も引き継ぐことができず、しかも二十年近くも前に中断せざるを得なくなっています。私にとりまして研究は

すでに過去のことでですから、この面から先生を追悼することはできません。しかし、大学で学ぶということ、あるいは教育ということ、またもつと広く人が生きるという面では、私にも先生を追悼する資格があるかもしれないと勝手に思いました。そのことをお話しします。

私は、先生に出会ってから十三年間にわたり教育研究のご指導をいただき、一九八四年（昭和五十九年）四月、島根大学教育学部に赴任しました。

その直前の三月、先生はすでにご退官されておられました。が、円山公園の一隅で送別会を開いていただきました。そのとき、先生はこう言われました。

「君ら、これから島根と山口に行きますけど、田舎教師になつたらいけませんよ」と。

その会は、島根に行く私と、山口大学工学部に赴任する長岡勉さんの送別会でした。私はびくつとしながら、「先生、それって、これから田舎に行く者に言うことじゃないでしょう」と思いました。

その瞬間です、先生は、「勘違いしたらいけませんよ。田舎にいる教師が田舎教師じゃないですよ。田舎教師は、東京にも大阪にも、この京都にもいます。どこにいても、世界を見ていなければ、それが田舎教師ですよ」と続けられました。

藤永先生らしい、実に絶妙な間をおい

ての、私たちへの送別の言葉でした。世界に目を向けていなければならない、と固く肝に銘じたはずでしたが、島根大学に行つてしばらくの間は、この言葉を思い出すことはありませんでした。教育学部の学生諸君に専門の化学を教えるのが私の仕事でしたが、どうやって化学に興味を持たせるかは、なかなか難しい課題でした。

結局、学ぶとはどういうことか、何をどう学ぶのか、それは何のためか、というような化学以外のことを織り交ぜて講義をするようになりました。

その資料集めの中で、島根大学に赴任する直前に見た『日本の面影』というラフカディオ・ハーン（小泉八雲）を描いたNHKドラマのことを思い出しました。

一八九〇年（明治二十三年）にハーンは松江にやってきて、尋常中学校や師範学校の教師になります。その街へ、そして彼が教えた学校にルーツがある大学へ、私も行くのだと思ひながら見たドラマです。その脚本を引っ張り出して読んでみると、すっかり忘れていましたが、その中にハーンが船で横浜につく場面がありました。

ドラマの中で、ハーンが、その時のことを振り返って話します。ハーンを演じたのは、あのウエストサイド・ストーリーの主演俳優、ジョージ・チャキリスで、日本語でセリフをしやべります。

芥川だより一九六号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 102	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 109	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 60	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 66	下村嘉明	5
新型コロナウィルス愚考	明石幸次郎	6
その 32		
オクラの山たより 80	因了生	7
隠された歴史 54・55	満田正賢	9
支離滅裂 近未来予想	y・s・	13
Short & short		
道を行く 三九	成瀬和之	14
俳句	土田裕	
	影山武司	18
編集後記	S K 生	19
ふみの道草 59	山椒魚	20

「船でー イエス フネノウエ 朝
富士山が見えるといわれました」

私は、急いで、すぐ甲板に出ました
しかし、一面にガスがあつて富士山は見
えません
(目の上に手をかざして)

見えないじゃないか 誰、ユウタカ、
ミエル、マウントフジ
すると、声がしました もっと高く
モット高く

私は(かざしていた手をとって高いと
ころを見て) 目を上げました

すると、富士山が見えました
高いところに、頂上だけが見えました
そんな高いとは思っていませんでした

モット高く

私は、このあたりしか見ていませんでし
た(と手をかざして見せ)

ところが、富士山は、こんなに高いとこ
ろにありました

高いところを見る

私は、自分の精神のことをいわれたよう
に感じました

モット高く

(山田太一『日本の面影』昭和五十九年
三月、NHK土曜ドラマ)

こういう場面です。「高いところを見
る」、大学で学ぶ時にも、志を高く掲げる
ということはあるのだと、改めて思うと
ともに、これは藤永先生が言われた「君

ら、田舎教師になったらいけませんよ」

「世界を見ていなければ、それが田舎教
師ですよ」の言葉と同じであると思いま
した。

実は、このドラマは、私が大学を去る
ことになる最後の年である二〇〇九年十
月にも島根地方でだけ再放送され、もう
一度見る機会がありました。

島根大学に赴任する直前と、大学を去
る直前にこのドラマを見るとは何とも因
縁じみていますが、この場面を再見した
とき、私は、島根大学での二十六年間、
私を支えてくれたのは藤永先生の言われ
た「田舎教師になったらいけませんよ」
というこの言葉であつたと、改めて確信
することができました。

「世界に目を向ける」という言葉を、
先生は恐らく研究者のあり方としておっ
しゃつたのだらうと思います。私はそれ
を、学ぶことと教えること、もっと広く
いえば、生きることと結びつけてしか受
けとめることができませんでしたが、大
学教師としての私の羅針盤になる言葉を
いただいたと思っています。

改めて、もう感謝の言葉もあります。
藤永太一郎先生、まことにありがとうございます
しました。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(かたちは心であり、心はかたちになる ■
大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談(60)

祖蔵 哲

「チャットGPTの哲学」

このコラムも今号で60回になる。5
年前、2018年6月、この芥川だより
が廃刊の危機にあつた。見事に復活した
時に合わせてこのシリーズを開始した。

それ以前の「哲学屋のつぶやき」シリ
ーズは46号までだったので、「芥川だより」
での私の本格的執筆は足掛け9年近くに
なる。10年は区切りの目安であるが現
役生活をリタイアしての思索経過、長い
のか短いのか。時間経過の長さの割に成
長幅は短いと感ぜられる。

今からちょうど10年前、2013年

8月、待望の退職を迎えた私はその11
月横浜港から世界一周クルーズ船に乗つ
た。この3か月の旅は第二の人生スター
トの区切りとなる。果たして世界は如何
なるものなのか。そして帰国、もう一度、
原点に戻る、「世界とは、人間とは何か」

自明を疑い、真理を探究する、それが哲
学である。

さて、時事問題を哲学してから5年経
過するが、相変わらず事件のネタには事
欠かない。現在もウクライナでの戦争は
クレムリンへのドローン攻撃など戦略が
ますます巧妙になり現代的情報戦の典型

になってきている。その一方ではスーダ
ンでの内戦のような従来型の紛争も発生
している。いずれにせよ犠牲者はあらゆる
層での弱者である。国内ではまた首相
演説時にテロが発生した。なにか漠然と
した圧迫された空気が突然どこかで噴き
出すという深層的な現象であろうか。予
測が不可能な時代に突入している。

予測不能といえ、最近話題の人工知
能を使った対話型ソフト「チャットG
PT」を開発したアメリカのベンチャー企
業のCEOが総理官邸を訪れ、総理と面
会した。特定の企業人が総理大臣と面会
するなどは異例である。その理由はこの
「チャットGPT」というものが、我々
の予想をはるかに超えて暴走しかねない
ということから、世界中での使用につ
いて国家が制限を設けようとしているか
らである。

さてそもそもこの人工知能とは何なのか。

(1) シンギュラリティと技術

2000年代、第二次人工知能ブーム
の時にシンギュラリティという言葉が盛
んに議論された。シンギュラリティとは
「特異点」を意味する言葉である。物事
の発展、進化は普通、時間とともに漸進
的に進むとかがえられるが、ある分野
の技術は指数関数的に発展する。ボール
を上横方向に高く投げるとある頂点を過
ぎてから少しすると急に落下する。いわ
ゆるこの放物線の逆が指数関数と思えば

いいが、この場合の特異点は急上昇変化である。だから、この特異点を通過すると何処にどのスピードで向かうのかもわからなくなる。まさに予測不可能状態である。これが技術に適合されるのが技術的特異点である。

「技術」とは、古代ギリシャ語の「テクネー」が語源で、学術、知識、芸術など製作的な知を意味していた。そしてそれは時代とともに変化し、16世紀以降、所謂「科学革命」によって、近代的な科学技術へと変化していった。科学の研究成果を人間の生活に役立たせる方法、科学を応用して自然を改変・加工して役立つ技術である。

その科学技術が特異点を通過しかかっている。その先陣を切っているのが人工頭脳である。テクネー（技術）が人類に最初出現したときは、鋤や鍬など人間の手の代わりとして現れた。やがては足に代わるものとして馬車が作られ、そしてエネルギー革命によって自然の動力を得るようになった。これによって人間は鳥や魚にも勝る空間移動の自由を得たのである。さらにコンピュータの発明は人間の脳機能を拡大し飛躍的な発展を遂げている。これは主にIC集積回路という物理的な道具の発展にもよるが情報を処理する方法的技術の発展に寄与するところが大きい。

シンギュラリティとはこのAI人工知能の爆発的發展により、人間が未知の方

向に投げ出されるという予測である。それが2045年問題と言われている。

(2) 人間と技術

先にも述べたように、技術は人間の物理的機能を補完するものであった。しかし、ギリシャ時代のテクネーには「言語」や「文字」も含まれていた。それは人間の思考を内部から外部へ移動することを可能にし、より広く、多数に拡散することができ、時代や地域を超えて影響を与えられる。「知能」がこの技術と結びつく物理的な技術物に知性をもたせることが可能になる。これがいわゆるロボットである。

ロボットとは、「人に代わって労働をするために作られた機械」という意味のほか、「人の姿を模して作られた存在」としても使われる。この名前は当時のチェコの作家チャペックが戯曲のなかで使ったことばで、チェコ語では「強制労働」を意味するらしい。しかし、現在ではロボットの反乱といった人間に敵対する対象としても語られるようになっていく。

人間は技術を使って自然を支配しようとしてきた。そして、その自然には生物細胞でできている人間自身も含まれる。その自然体としての人間に人工頭脳を組み込むのがサイボーグである。ロボットの主体は機械であるが、サイボーグの主体は生身の人間である。完全なるサイボーグが実現する、技術のシンギュラリテ

イは人間、自分自身をも越えようとしているのである。しかし、核技術が人間、いや地球全体を破壊する可能性があると同様に、このAI人工知能も人間を破壊する可能性を持っている。

(3) 二つの人口頭脳

さて、最近よく聞く言葉「ディープ・ラーニング」、日本語では「深層学習」と呼ばれているが、要は人間の脳の神経細胞構造をまねて学習する人工頭脳の手法のことである。近年、人間の脳の構造が飛躍的に解明されてきたと同時に進んでいるのがこの技術である。しかし、重要なことが一つある、この開発方向がどうも一つの方向に固定されそうな様子である。もともと人工頭脳の開発は二つの方法が研究されていた。一つは、「全脳エミューレーション」、一方は「機械学習」である。前者は人間の脳の構造を細部まで再現しようという方向であったが、後者は人間の脳の簡略化されたモデルを基本に開発を行うという。近年、開発や発達進歩が目覚ましいのは後者の「機械学習モデル」である。簡略化モデルは実際の人間の脳とは異なる、だから旧来の人間の振る舞いとは違う思考構造をする可能性もある。しかし、そのことが革新的な場合もあるから開発が要望されるのである。特に商業利用では従来人間が思いつかないような販売方法や宣伝効果も作り出し、消費者の欲望を刺激する。人間を超える

とは人間自身の「欲望」でもある。

(4) 人工知能のブーム

何かがわからない。何か疑問であるという時、その答えを得るためには何がわからないのかを明確にしなければ答えは得られない。このような当たり前の現象を解決するのが従来は容易ではなかった。それを可能にするのが「対話」である。「何かわからない—何に関することなの」「これらの中にある？—ああ、これだよ」。対話というのは自分の思考を言葉として外に出すことにより、自分に再度返すこと。哲学的に言うところ「弁証法」でだ。プラトンやヘーゲルもこの手法により哲学した。チャットGPTは対話型人工知能である。従来の人工知能は人間の側から問題を設定し、そしてデータを入力しなければコンピュータは答えを出してくれなかった。しかし、「対話型」はそうではない。ここでは人間の思考・パターンの伝統は引き継がれている。

1950年代にチューリングが「機械は考えることができるのか？」というテストを提唱して以来、人工知能の開発の歴史はまだわずか70年程度である。その間にAIブームは3度起きた。現在は先に述べた第三次機械学習ディープ・ラーニングの時代である。その特徴は世界の知識インターネットと繋がり膨大なデータを処理できることと、自ら考えることである。そして見る、聞く、触るなど人

間の五感に相当するインターフェースの技術的發展によりそれらがデータとしても取り込むことができ、また逆に出力もできるようになった。これにより従来は単純作業しか出来なかったいわゆる「ロボット」は、今や画家や小説家にさえなれる時代が到来したのである。現実にある写真コンテストではAIが作成した写真が一位を獲得した。次は人間を越えるかも。すでにシンギュラリティは来ているのか。今、世界は混乱してきている。

(5) 規制と倫理

現在デジタル空間には膨大なデータが蓄積されている。もちろん国家機密や企業特許などは容易には侵入できないロックがかかっている。しかし、このIT技術はインターネットを通じてすべてのデータにアクセスを可能にするかもしれない。そして、従来から問題になっていた個人情報などの使用や著作権侵害などは依然として問題である。現在、ヨーロッパの一部の国などがチャットGTPの使用を禁止しているというが、どこまで徹底できるのか疑問である。スマートフォンが出現した時には、学校では使用を禁止してきたが、今やそこではタブレットとして積極的に使っている。何事も一律の規制はできないであろう。AIが注目され出したところに将来なくなる仕事というものが発表された。「一般事務員」「ホテルフロント係」「店員」「バス・電車運転

手」「警備員」などである。当時は皆、不安に駆られた。しかし、すでに現在、一部のものはAIに置き換わっている。そして、そもそも、これから予想される人口減少による労働力不足は逆にこれらの開発導入が期待されるという状況に変化してきている。

倫理の問題は複雑である。これはAIも人間も同じであるが、法律は守らなければならぬ。しかし、AIにとって狭い共同体の中の習慣や伝統はどうなのか。そして、言葉にならない感情や共感はどうなるのか。人間を越えるとされるAIの将来はやはり見通せない。

(6) 神か悪魔か

人間を越えるものそれは「神」である。果たしてAIは神になるのか。しかし、神は人間を創造したとされる、AIは人間が創ったものだ。だから神にはならない。だが、ここで考える必要がある。創造神話は人間が作った物語である。そうであるなら、人間が神を創ったことになる。こう考えるとAIは神になるかもしれない。けれどもそれは悪魔になる可能性もある。人間の「欲望」が悪魔となり人間を誘惑する。しかし、この悪魔は本来、神の善を示す試みなのだ。果たして人間はそれに気が付き、「善」を知り取り戻すことができるのか。

現在、様々な議論を抱えつつも、人間

の能力を超える人工頭脳の実現を期待する趨勢である。これはやはり、現代の人間が解決できていない多数の課題を抱えているからなのだろう。戦争は無論のこと地球環境問題や貧困、人間はこれらに対していまだに解決策を見つけないでいる。果たしてシンギュラリティを越えた人工頭脳はこれらを解決してくれるのか。はたまた人間は彼らの奴隷となりそれです満足していくのか。すぐ近い未来は混沌として見通せない。

今月はまだまだ未知な人口頭脳を哲学してみた。最後に読者に問う。果たて、今号は私が書いたものか、「チャットGPT」が書いたものか判別できるであろうか。

大峯奥駈道 (66)

下村 嘉明

体験型人間学 16

先日、ある警備会社の応援に行った。私と若い警備員と二人で行った。私は、この警備会社へは、これで3回目になる。気に入っている会社だ。最初に独りで行った時は、道路に面した戸建ての資材の搬入車両を止めるので片側通行の交通誘導である。応援先の警備員は、半年前に入社した75歳の爺さんだったが、丁寧な私への対応に驚いた。二日間通ったので、話をいろいろとした。彼は、鹿児島

の甕島生まれで、中学を出て叔父を頼って関西に来て叔父と同じペンキ屋を最近までしていた。一年ばかりブラブラしていたら、警備員募集のチラシが入っていた。家内に勧められて応募したという。彼の会社は、社歴が30年と古い。スタッフも25人ほどで契約会社も一つは、公営ギャンブルでもう一つは大手住宅メーカーの二つでやっている。とても安定した経営に思える。

彼によると、社長は75歳ぐらいの女性社長で、父親が起こした会社を引き継いだらしい。なんでも阪神間では、3つほど女性社長の警備会社があるらしい。三度目に行った現場でも、30年、15年目という二人の警備員がいて丁寧に教えてくれた。非常にまじめで的確だった。現場に水が溜まり、コンクリートの打設が3時間ばかり遅れてしまい、片側通行の誘導も3時間余り休みなしでやったのできつかったが、普通は早く終わるのが普通らしい。

この会社は、なかなかいい会社だと思
う。

新型コロナウイルス禍愚考

(その32)

明石 幸次郎

日本の人口が年々減少しています。出生数がピーク時(1948年)に270万人であったのが2022年は80万人を割っています。この状況を岸田首相は「社会的機能を維持出来るかどうかの瀬戸際である」との危機感を示しています。その為に政府はこの人口減を食い止め、出生率を増やすため“異次元の少子化対策”を打ち出して、子供を産み、育てる社会、経済的な制度を充実させようとしています。

しかしながら“異次元”と言う割には従来の政策の延長で児童手当、住宅サービス等、育児休暇充実など子供を持つ世帯への支援が主なもので、少子化の大きな問題とも言える。結婚をする人口が減っていくのをどうするかと言った対策は
何もないようです。

当然、結婚は両性の合意に基づいて行うもので、国家が立ち入ることは出来な

いことであるが、結婚して、家庭を持ち子供を育てたいと思っても、経済的格差問題とか社会的な要因で結婚をしなくても出来ないという人達も大勢います。その人達に対して、政治が目を見送らざる事出来ないと思います。

今や未婚率が男28.2%、女17.8%となつて、その比率が年々上がっています。又、コロナ禍で先行きの不安、出会いの場が失われたことから結婚する人は減りに2020年の婚姻数は52.5万件でその前年比で12.3%も減少しました。

その結婚をしない、出来ないことは個人の考え方、事情で異なりますが、しないと言う人の意志を強制的に変えさせることは難しいが、反面、したくても出来ないのは、先に言ったような経済的な問題が大きいのと思われまふ。特にコロナによって非正規社員の経済的な基盤が揺らぎ、失業といった精神的、経済的な問題を抱えては結婚が遠のいてしまっている人もいます。

今や雇用者の5人に2人が(40%)がその非正規雇用者で、正規社員と比べて賃金は低く、賃金上昇も少なく、社会保険の未加入などもあり、中々、結婚をしたくても相手から経済的要因で選別される立場になっています。

この結婚をしたくても出来ない状況を作ったのは、小泉内閣の竹中平蔵が行った新自由主義経済導入により経済政策を大幅に転換したことです。まずやったこ

とは労働分配率を下げるとの名目で、それまで規制されていた製造現場への派遣社員(非正規社員)を認めて、製造コストを大幅に下げた事でした。特に労働集約型の自動車産業は非正規社員採用(コストカットの犠牲者)により大幅な利益を生み企業体質改善に成功しました。犠牲はその時から生まれた派遣社員という非正規社員の人達であります。これらの年代から30年間日本の労働者の実質年間平均賃金は増えておらず、特に非正規社員は低賃金で働かされ、結婚が出来なくなり、結果的には出生人口減にも繋がっているとも言えます。これは国家政策に失敗が招いたものとも言えます。それを償うような婚姻人口を増やす経済的、社会的なサポートを政策としてやらないと“異次元の少子化対策”と言えないし、人口増は難しいと思います。

オクラの山たより(80)

困了生

一

「年の暮れ」を季語とした句には芭蕉の「年暮れぬ笠着て草鞋(わらじ)はきながら」という名句や芭蕉の弟子路通の「い

ねいねと人はいはれつ年の暮れ」という句があります。もちろん二万を越える句を詠んだ一茶にも「ともかくもあなた任せの年の暮れ」といった「年の暮れ」の有名な句はあります。しかし、決してよく知られた句ではありませんが、次の句は一茶らしい句で筆者などは思わず膝を打って「その通り、よくぞ言つたり」といいたくなるような句です。

羽生えて銭がとぶなり年の暮れ

一八一六(文化十三)年、一茶五十四歳の句です。当時は食糧などを「付け」「掛け」で買ひ年末などにまとめて支払う節季払い(せっきばらい)が主流でしたから年の暮れともなるとあちこちの支払いで庶民の懐からはお金があつという間に飛んでいきました。江戸にあつて貧しい裏店生活をしてきた記憶をもつ一茶にとつても「羽根が生えたようにお金が飛んでいく」という感覚は庶民と共有しうる感覚であつたのでしよう。この「羽生えて銭がとぶなり年の暮れ」の句は一茶が晩年に書いた「俳諧寺記」の末尾につけられた句です。

晩年の一茶は江戸を離れ故郷の北信濃の柏原に暮らしていましたが、金銭については江戸と同じく厳しい世界でした。

「下々の下国の信濃もしなの、奥信濃の片隅、黒姫山の麓なるおのれの住める里」と一茶は故郷のことを記し、そんな里で

も銭なしでは年は越せないといふ文の中で書き、そのありさまを「飢え顔したる物貰い、蚤取りまなこ(蚤を探し回る時のような目つき。きよろきよろ目のこと)の掛乞(かけこい)借金取り)は、わらじのままて囲炉裏に踏み込む」と書いていきます。「銭金ほど汚きものはなし」などと言っているのは雲の上の人、富裕な人のことで、自分のような庶民は金銭の悩みを持ちつつ日々の生活を何とかしながら生きていくだけだというのが一茶の思いだったようです。その思いから出たものでしょうか、芭蕉や蕪村に比べ一茶には金銭に関わった句が際立って多いのです。

一茶の故郷の柏原の名主の子孫である中村英雄氏が数年来の苦心の末、一茶の全句を調べた結果、一茶は銭や金に関する句を百四十五句も詠んでいました。これは一茶の句の特色がよくわかるだけではなく、当時の庶民の生活ぶりや物価の一端を知るには格好の資料となります。例えば次の句です。句の後の「寛」は寛政年間の句、「化」は文化年間の句、「政」は文政年間の句であることをそれぞれ示しています。

- ・月さして一文橋の春辺かな 化 8
- ・小松菜の一文束やけさの霜 政 2
- ・一文が水も馬にも吞ませけり 政 5
- ・ついそこの二文渡しや春の月 化 9
- ・三文が霞見にけり遠眼鏡 寛 2

「月さして」は「月の光がさしている」ということで、「一文橋」とは橋の通行料(当時「橋銭」といいました)が一文であつたということです。

小松菜は一文。この値段で棒手振から買っていたのでしょう。

「一文が水」とありますが、水に値がついていたのは水が貴重品であつたためでしょう。一茶が住んでいた本所・深川のあたりは湿地帯で飲料に適した水が井戸や上水道から得がたい土地でしたので、水には常に不自由し飲料用の水も「水売り」から買わねばなりませんでした。もちろん、馬に飲ませる水にも金はかかりました。

「二文渡し」とは渡し船の船賃が二文であつたということです。一茶は隅田川の東、小名木川、中川のほとりに住んだことが多く、俳人としての活動の地盤は葛飾方面でしたから渡し船を使うことも多かつたのでしょう。

「三文が霞」の句には「白日湯台に登る」という題がつけてあるので昼日中に湯島天神の境内で実際に詠んだ句であることが分かります。湯島天神は台地の端にあり、見晴らしがよかつたので、茶店で遠眼鏡(望遠鏡)を貸しており、その借り賃が三文だつたわけですね。

江戸時代を通じて米の相場、為替の相場が激しく変動するため、一文が現在のいくらぐらいになるのかは正確には分か

りません。しかし、一両が米一石、つまり百五十キロの値段であり、四千文が一両であつたことから考えていくと一文はおおよそ二十円前後と考えていいように思えます。そうするとソバは当時十六文でしたから三百二十円となり、駅の立ち食いソバとほぼ同じ値段です。一茶の頃の宿屋の宿泊料は二百文ですから四千元ほど。現在の素泊まりの安いビジネスホテルなら四、五千円くらいでありますから、これもだいたい一文二十円前後で納得です。

ここで大急ぎで一言いわねばならないのは、金銭に関わる百四十五句を一茶が江戸滞在中に、それは一茶が江戸の下町で貧困にあえいだ時代でもありませんが、その時に特に多く詠んだのではないということです。

中村英雄氏の調査によれば一茶が二十八歳であつた一七九〇(寛政二)年から一八二六(文政九)年の死の前年にいたるまでずっと作られています。江戸在住中の句は全部で三十六句あり全体の四分の一に過ぎません。五十一歳で帰郷して生活が安定した後でも金銭のことにかなり気になって多くの句を詠んでいたのではとつい思ってしまう。

以下、一茶の句を紹介しつつ文化文政の頃の庶民の暮しや物価がどれほどであ

つたかを見て行こうと思います。まずは銭一文の句から。

- ・一文の花火も玉屋たまやかな 政 8
- ・劣らじと一文風も上がりけり 政 7
- ・一文に一つ鉦(かね)うつ寒さかな 政 2

値段が一文の花火もあつたらしいのですが、子どもでも遊べる線香花火だったのでしょうか。パチパチとはじけるかわいらしい火花を見つめるのは大人でも楽しいものです。

「一文風」は一文という値段で買った風のことです。きっと街を売り歩く物売りから買ったのでしょうが、正月の子どもの楽しみでした。

行商人とともに年末に玄関に来て念仏を唱えたり札を売ったりして金銭をせびる門付け(「節季候」「願人坊主」など)の多いことは江戸の名物でしたが、北信濃の柏原でもこれは同じでした。もつとも門付けの方もしっかりしていて一文では一回しか鉦を打たない。しかし、そうは言っても一回分の御利益はあるはずで、それなりの厄払いにはなるはずですね。

- ・三文の草花植ゑて夕涼み 政 4
- ・重箱の銭四五文や夕時雨 政 2
- ・上々のみかん一山五文かな 政 6
- ・涼風に月をも添えて五文かな 化 9

「三文の草花」の三文はおそらく二束三文の三文でとても価値の低い誰も見向きもしないような草花であることをいっているのでしょうか。夏の夕暮れ時、自ら植えた草花がかわいい花を咲かせぬものかと思いつつ夕涼みを楽しんでいる一茶の姿が見えてくるようです。

「重箱の」の句には「善光寺門前憐乞食」と前書きがあり、時雨が降る寒い夕暮れになっても銭を満足に得られないホームレスの姿を詠んでいます。弱者をいとおしむ一茶の気持ちがよくあらわれた句です。ホームレスを詠んだものには次の句もあります。いずれも一茶のヒューマンな面がよくあらわれています。

- ・ 乞食子や膝の上までけさの霜 政3
- ・ 母親を霜よけにして寝た子かな 政4

前書に「橋上乞食」とある

「乞食子や」の句はしもやけで赤黒くはれ上がった膝頭に真冬の冷気は容赦なく襲いかかっている風景です。この子はこれからどうやって生きていったのか。「母親を」の句は髪をふり乱し、垢つき汚れた風体のホームレスの母親が、我が子に覆いかぶさるように寝ている橋上の乞食の姿を詠んでいます。痛ましい光景です。「霜よけにして寝た」という描写は理屈抜きの一茶の直感だったのでしょうか。こうしたヒューマンな視線は一茶の見逃すことのできる魅力の一つです。

「上々のみかん」の句によればミカン一山が百円です。一山に何個のミカンがあつたのか、気になります。

「涼風に」の句は秋になって風も涼しくなり満月も加われば、この値打ちは五文だね、という句意です。一茶には風物の評価を銭で計った句がこれ以外にもいくつあります。「三文の草花」の句もそうですが、たとえば、「八文がつつじ咲きけりほととぎす」という句です。この句の「八文がつつじ」はツツジの値段が八文であるということではありませぬ。句の内容は八文ほどの低い値打ちしか感じられないツツジの花が咲くと何と風流なことにホトトギスがしたよ、ということですが、二つのもののギャップに滑稽さを求めた句です。

- ・ 木枯らしや廿四文の遊女小屋 政2
- ・ 店賃の二百を叱る夜寒かな 化13
- ・ なつかしや三百店(たな)も梅の花 化9

「木枯らしや」は道端で客の袖を引いて商売をした夜鷹と交わるための料金が二十四文であつたことが分かる句です。夜鷹は最下層の私娼で多くは三十歳以降の女性で梅毒にかかっていた者が多数いました。梅毒にかかると鼻が欠けるといわれ「はな散る里は吉田町鮫河橋」「安物のはな失いは吉田町」と川柳に詠まれたように本所吉田町は江戸市中に八十九所

以上あつた岡場所(官許の遊里であつた吉原以外の私娼の地のこと。一茶の江戸在住の時期に全盛を極めた。)の中でも特に有名な所でした。一八一七(文化十四)年に江戸に出たときに皮膚癬(ひぜん)寄生虫による伝染性の皮膚病)にかかった一茶が門人に向けた出した手紙にこの吉田町のことが出て来ます。拙訳で引用します。

十一月はじめの頃から、皮膚癬という腫れ物が体中にできたので、気疲れのするところへは少し遠慮して、人には吉田町二十四文でも相手にして遊んだかと思われるのではなからうかと考え、下総西林寺という山寺にこもっています。

この文面から何となくですが一茶が夜鷹の多くいた吉田町に行つたことがあるように筆者には感じられます。そうしたことはともかく冬の夜風の中で夜鷹たちの菰(こも)がうごめき、今にもつぶれそうな仮小屋の中にはわずか「二十四文」にその蝕まれた肉体を賭けて浮世の冷たい風に抗いつつ続けている人たちの悲惨な現実を「木枯らしや」の句は表現しています。遊女を詠んだ句には他に一八一〇(文化七)年の作である「玉あられ夜鷹は月に帰るめり」や浅間山麓の宿場で一八二一(文政四)年に詠んだ「霜がれや鍋の墨掻く小傾城」があります。また「木枯らし」と悲惨な状況にある人を詠んだ句に

は「木枯らしや空(から)呼びされし按摩坊」があります。目が見えないのをいいことに按摩をからかって用もないのに呼ぶ心ない人々。目の見えぬ人に対する冷たい世相を見つめる視線が感じられます。忘れがたい秀句です。

次は「店賃の」の句です。当時の宿屋で一泊したときの宿泊費が二百文でしたからずいぶんと安い家賃ですが、前に記した裏店の最も安い長屋であつたのでしよう。その安い家賃も払えず冬の夜に大家に叱られる貧しい隣人。大家の叱声がピンピンと聞こえてくるようです。

「なつかしや」の句で「三百店(さんびやくたな)」とは家賃が三百文の借家だということですが。一八〇四(文化元)年に一茶がはじめて持った自分の家(現墨田区一丁目)は、もちろん借家でしたが、小さいながら庭に梅の木などがありました。

三

少額の話が続いたので、ここらでドンと金額を上げると次のような句があります。

・ 八兵衛や耳たばにおく小二朱判 政2

「八兵衛」とありますが、人名ではありません。一茶がよく行つた房総地方の方言で飯盛女(めしもりおんな)、宿場女郎の

ことを指します。彼女たちが「しべえしべえ（「やりましよう、やりましよう」の意 四兵衛と四兵衛を合わせて八兵衛）」と言ったところから「八兵衛」といったのだと一茶自身が前書きで書いています。

「耳たぼ」とは耳たぶのこと。「耳朶」ともいいます。

「二朱」とは銀貨の南鐐二朱銀か二朱判（判は金貨の呼称・美称）のことで一両の八分の一（現在の一万円ぐらい）にあたります。この二朱の銀貨や金貨はすでに何度も改鑄発行されていて一茶が生きていた頃の新しい二朱をサイズが少し小さくなっていたので「小二朱」といつていました。弟子の家を巡回する際に待遇のいい家では二朱くれることもあったと一茶が書き残しています。一茶もたまには八兵衛に小二朱をやるといふ大判振る舞いをしたことがあったのでしよう。「八兵衛や」の句は一茶の実体験のような雰囲気があります。

実をいえば一茶は宿場女郎、つまり飯盛女のいる旅籠がずいぶん好きであつたらしいのです。一茶は一八〇七（文化三）年四十五歳の頃から五十五歳の頃まで遺産相続争いなどのこともあつて足繁く江戸と柏原の間を往復しているのですが、「本庄市史」によれば一茶はいつも飯盛女のいる旅籠に泊っていました。その理由は想像するしかありませんが、近世の宿である旅籠屋は飯盛女のいる宿とない宿とはつきりと分かれていま

た。飯盛女つきだとふつうの宿泊料の二倍から三倍ぐらいの料金を請求されたらしいのです。幕末の頃ですが、長野の商人が江戸へ行ったときに宿泊代二百文に對して飯盛女をつけると四百文の追加料金を請求されたという記録が残っています。

- ・行く年や湯水に使ふ金一分 政4
- ・二歩判の初音出しける梅の花 政2
- ・こね土（つち）の百両包みや恵方棚 政6

「金一分」は一両の四分の一です。一千文の銭に替えられます。今の貨幣価値でいえば二万円ほどです。庶民にはとつてかなりの金額ですが、「湯水のように」使えるほどの金額ではありません。つましい年末の暮らしぶりを、ユーモアをまじえて詠んだ一句です。

一茶の生活ぶり、特に帰郷してからの生活ぶりを示す資料としては「小升（こま）屋通い帳」という記録があります。一茶の家の近所にあつた小升屋は柏原の旅籠兼雑貨商で薬種なども専門に扱っていました。一茶は日用品をこの店から購入し、どれほど支払ったかの記録をこの通帳に残しています。そのためこの通帳は一八二〇（文政三）年前後の一茶の実生活や当時の物価をうかがう上で貴重な記録となつています。「白米二升百五十文」（つまり、この時代には一両は五千文であつた

ということになります。）は他の物価を推定する時に有益な資料となります。また黒大豆五合二十文、塩五合二十四文、筆一本二十四文等にまじつて「禪（ふんどし）百文」（数量不明）などという記述があるのはおもしろいです。それはともかく、どの品物もほとんど「文」というレベルで購入しており、せいぜい二分か三分払つて清算しており、小判で支払つたという記録はありません。庶民の生活の中ではまず小判を使うことはなかつたようです。

「二分判」は二分金のこと。二分金は一両の半分ですから大金です。たいそう素晴らしいウグイスの「初音」だったことでしょう。もちろん、この句も風物の評価を銭で計つた句です。

「こね土の百両」とはこねた土で作つた百両包みです。年の神（正月の神）を迎えるための棚を恵方棚とも年棚ともいいました。捏（こ）ね土で作つた百両包みを年棚に供えて新年の多幸を願う貧乏な庶民の切ない姿です。

四

庶民らしい親しみのある人間味・野性味・平民性を特色とする一茶の句風は生前から「一茶調」と俳諧の世界ではもてはやされました。この「一茶調」は花鳥風月を尊ぶ伝統的な世界から抜け出して人生をありのままに見ようとする一茶の

態度から出てきたものでした。銭・金は我々の日常生活には欠かせないものです。一茶は五十歳で故郷柏原に定住するまで、浮き草のような生活を長い間送つてきており、苦難も多くなめてきました。金銭に関わる句が多いのは、社会の実相や自分の体験をできる限りありのままに表現しようとしたのではないか。これは筆者の想像ではありません。

隠された歴史（54）

満田 正賢

天武天皇が何者かについては様々な考察がなされています。私は大和（おおわ）岩雄氏の『天武天皇論』を読んで、その一部を私が今まで考察してきた「隠された歴史」に取り入れることを試みました。大和岩雄氏の『天武天皇論』（大和書房）は大和岩雄氏（おおあま）皇子と漢（あや）皇子が同一人物であるということをついての誄（しのびごと）に関する考察などによって推定しています。大和氏の説の内容を要約すると次のようになります。

・日本書紀にある天智の「舒明天智」年十六にて誄したまう」と本朝皇胤紹運録、一代要記等にある天武の「六十五

「歳崩年」という記事を比較すると、天武は天智の四歳年上となる。

・宝皇女（皇極・斉明）は田村皇子（舒明）と結婚する前に、用明天皇の孫高向（たかむく）王と結婚し、漢皇子を生んでいる。漢皇子は大海人皇子の「別名」であったのを「別人」に変えたのだと推定する。

・大海人皇子と漢皇子が同一人物であると推定した根拠の一つは大海人皇子と東漢（やまとのあや）氏との強い繋がりにある。大海人皇子が吉野を出発する時の側近の中には、（*東漢氏系の）書直智徳（ふみのあたいちとこ）がおり、大海人が高市皇子につけた人物に、民直大火（たみのあたのおおひ）・大蔵直広隅（おおくらのあたひひろすみ）・坂上直国麻呂がいる。その他東漢氏系の多くの人物が大海人皇子側についているのは、東漢氏系との親近関係を示すものである。

もう一つの根拠は天武の殯（もがり）時の誄人にある。大海人皇子は大海人（大海、凡海）氏に養育されたから「大海人」という。そのことは天武天皇の殯の時に大海宿禰荒蒲（おおあまのすくねあらかま）が「壬生事」の誄を行なっていることから証される。皇極紀元年条に「乳部、此云美父」という記述があり、壬生（美父）は乳部と同じである。大海氏は、崇神紀に尾張大海媛がみえ、崇神記では意富阿麻（大

海）比売を尾張連の祖としていることなどから尾張氏系とみる。壬申の乱における尾張氏の協力は、「尾張の大海」である「天武帝の乳母大海氏」の媒介によるものと推測する。そして、天武天皇の殯は持統二年十一月に当麻真人智徳が「皇祖等の騰極（ひつぎ・日嗣・日継）次第」を誄して終わっている。

天武天皇の父を舒明天皇とすると、正統ではない用明天皇の子・麻呂子（まろこ）（*当麻公の祖）の子孫である当麻真人智徳（たいまのまひとちとこ）が代表として誄を行なっていることはおかしい。だが天武天皇の父を高向王（*用明天皇の孫）にすると、血統上もつとも近い縁者になり、誄人になれるのは当然となる。

・漢皇子は高向王の子だから、大海氏が尾張氏系なら尾張氏系と高向の結びつきがなければならぬが、尾張国愛智郡には、式内社の高牟久（たかむく）神社があり、越前国の式内社の高向神社は坂井郡にあるが、坂井郡の海部（あまべ）郷（海部が大海氏を名乗る）には尾張氏が居住している。また、越前の高向神社は高向郷にあるが、新井喜久夫は、坂井郡海部郷に拠点をもっていた尾張氏が、坂井郡高向郷にいた継体天皇との「人的交渉により、尾張氏の娘を娶ったものと思われる」と推論しているように、漢皇子の父高向王にかかわる「高向」は大海の尾張氏と結

びついている。つまり、漢皇子の父高向王と大海人皇子の「大海」は回路をもっている。

越前国江沼郡には財部（たからべ）氏が多く居た。高向王と結婚した宝皇女は、和風諡号を「天豊財重日足姫（あまとよたからいかしひたらしひめ）」というが、「財（たから）」が本名である。高向王と江野財臣が系譜上結びつきとや、越前での高向と江沼の結びつきと、高向王と財皇女の関係は、奇妙に重なっている。

・『日本書紀』は大海人皇子について、「皇弟」「大皇弟」と書き、天智天皇の弟であることを力説している。また、「東宮大皇弟」と書き、大海人皇子が正当な皇位継承者であることと、弟であることを示している。しかし、天武天皇には「東宮大皇弟」の意識はなかったと思う。天武天皇は、自らを漢の皇祖に擬していたとみるのは通説化しているが、漢の皇祖は、前王朝の正当な皇位継承者ではない。「革命」による新王朝の樹立者である。

・「東宮大皇弟」の創作は、元明天皇即位の宣命（せんみょう）の「不改常典」の延長上にある。持統天皇が嫡子・嫡孫の継承に執念を燃やしたのは確かだが、原点は天武であって天智ではない。それを天智に変えたのは、首（おびと）皇子（*聖武）を皇位につけようと計画した段階であろう。嫡孫の即位さえ

天武の皇子たちは反対したのだから、四代目（*天武・草壁皇子・文武・聖武）の曾孫の即位など、まだ健在だった天武天皇の子たちの反対は目に見えていない。とすれば天智天皇を持ち出すしかない。それが宣命の「不改常典」であり、（*天智の）諡号の「天命開別（あまみことひらかすわけ）天皇」であり、『日本書紀』の孝徳・斉明朝・天智称制の「皇太子」であろう。天武天皇は孝徳紀では「皇太子」の「皇弟」となり、天武紀では、「天命開別天皇」の「東宮大皇弟」となった。その結果、大海人漢皇子は漢皇子と大海人皇子に分けられたのであろう。

・『日本書紀』の天武天皇の出自を正当化するため、持統天皇の出自についても工作が見られる。持統天皇の出自について、天智天皇七年二月二十三日条に、「有蘇我山田石川麻呂大臣女曰遠智娘（おちのいらつめ）或本云美濃津子娘（みのつこのいらつめ）、生一男二女、其一曰大田皇女、其二曰鷗野（うの）皇女、及有天下居于飛鳥淨御原宮、後移宮于藤原、其三曰建（たける）皇子、唾不能語。或本云遠智娘生一男二女、其一曰建皇子、其二曰大田皇女、其三曰鷗野皇女。或本云、蘇我山田麻呂大臣女曰芽淳娘（ちぬのいらつめ）、生大田皇女與娑羅々（さらら）皇女。」とある。鷗野皇女と娑羅々皇女は、持統即位前紀に「鷗野讚良（うのさらら）皇

女」とあるから、同一人物を書き分けている。この持統天皇の出自でまず問題になるのは、弟の建皇子である。建皇子は或る本によれば持統の弟になっているが、別の或る本によれば持統の兄になっている。この異伝が載っていた「或る本」が実際にあったのではなく、『日本書紀』の編者が、「或る本」によるとする異伝を無理して創作したのであろう。この異伝の創作は、天武天皇が天智天皇の弟だとする説の合理化工作と考えられる。合理化には七十年前に生まれた兄弟は、どちらが兄か弟か不明の例があることを示すだけでなく、同一人物の別名とみられていた名が別人の名であることを示す必要があった。そのため創作されたのが、第二の異伝である。

・白村江の敗戦の原因は斉明天皇の百濟への異常な肩入れであり、大海人は終止、新羅寄りの立場でいた。郭務棕（かくむそう）及び唐の軍隊が日本を離れた直後に壬申の乱が起ったのは、唐と親密な大友皇子側、新羅と親密な大海人側の対立があり、大海人は唐の軍隊のプレッシャーが消えたので、すぐに行動を起こしたと考える。そして、『旧唐書』にある「旧小国」とは壬申の乱における東国軍のことであり、大海人（天武）が東国軍による新しい国家を「日本」と称したのである。

大海人皇子と漢皇子が鷗野皇女と娑羅々皇女のように同一人物の別名を別人に仕立てたという大和氏の説には説得力があります。又、天武の誅の記述は日本書紀の中で唯一詳細に記されています。「この日、はじめて奠（そなえもの）をたてまつり、誅（弔辞）をした。第一に大海宿禰荒蒲が壬生事〔天武幼年の事〕を誅した。つぎに浄大肆〔正五位上〕伊勢王が諸王の事を誅した。つぎに直大參〔正五位上〕縣犬養宿禰大伴が、宮内の事をとりまとして誅した。つぎに〔浄大肆従五位下〕河内王が、左右大舍人の事を誅した。つぎに直大參当麻真人國見が左右兵衛の事を誅した。つぎに直大肆〔従五位上〕采女朝臣竺羅が内命婦の事を誅した。つぎに直廣肆〔従五位下〕紀朝臣眞人が膳職の事を誅した。」

「この日、直大參布勢朝臣御主人（みぬし）が太政官の事を誅した。つぎに直廣參〔正五位下〕石上朝臣麻呂が法官の事を誅した。つぎに直大肆大三輪朝臣高市麻呂が理官の事を誅した。つぎに直廣參大伴宿禰安麻呂が大藏の事を誅した。つぎに直大肆藤原朝臣大嶋が兵政官〔のちの兵部省〕の事を誅した。」

「この日、直廣肆阿倍久努（あへのくの）朝臣麻呂が刑官〔のちの刑部省〕の事を誅した。つぎに直廣肆紀朝臣弓張（ゆみはり）が民官〔のちの民部省〕の事を誅した。つぎに直廣肆穗積朝臣蟲麻呂が諸國司の事を誅した。」

「持統二年、布勢朝臣御主人、大伴宿禰御行（みゆき）がかわるがわる進んで誅した。直廣肆〔従五位下〕し当麻（たいま）真人智徳（ちとこ）が皇祖らの登極〔即位〕の次第を誅奉った。礼というものである。古は日嗣といった。終わって大内陵に葬った。」*「原本現代語訳日本書紀」山田宗陸訳

子を同一人物と考えた大和氏の考察には、かなりの信憑性があると思われまます。日本書紀に出てくる天武の誅人の大半は続日本紀にも登場し、大伴宿禰安麻呂は和銅七年（七一四）に、石上朝臣麻呂は養老元年（七一七）に亡くなったと記されています。すなわち天武の誅の記事はウソのつけない記事であったと考えられます。

大海宿禰荒蒲が壬生事〔天武幼年の事〕を誅したのは、大海人皇子の乳母が大海氏であったことを示しており、最後に当麻真人智徳が皇祖らの登極〔即位〕の次第を誅したのは、当麻氏が大海人皇子の系図につながっていることを示しているという大和氏の考察を少し補足しておきます。

また、大和氏は「日本書紀はなぜそのような改竄をしたのか」という問題にも「天武天皇の子が多くいる中で、元明天皇、藤原不比等などの、首皇子を即位させたいという強い思いが、『日本書紀』による歴史の改竄と『不改常典』の創作に踏み切らせた」という仮説を立てています。この仮説にも説得力があると考えます。

舒明天皇の殯の際には東宮開別皇子（*天智）が誅していますが、皇極元年十二月にはじめて舒明の喪（式）を行なった際には、息長（おきなが）山田公が日嗣を誅しています。舒明天皇の父である押坂彦人大兄皇子の母が息長真手王の娘広姫であることが、息長山田公が日嗣を誅した理由であると思われまます。この舒明天皇の誅の例は大海人皇子と漢皇子が同一人物であることの裏付けとなりまます。すなわち、大海人皇子は日本書紀の記述上は用明天皇と別系統の血筋になりますが、高向王の子である漢皇子であれば用明天皇につながります。そして、用明天皇を祖とする当麻氏につながります。この誅人の記述から、大海人皇子と漢皇

次号では、今回紹介した大和岩雄氏の『天武天皇論』に対して私が問題と感じている点について述べる予定です。

隠された歴史（55）

満田 正賢

前回、大和（おおわ）岩雄氏が『天武天皇論』（大和書房）で述べた、大海人（おおあま）皇子（天武天皇）と母の皇極（斉明）天皇が前夫・高向王との間で

前回、大和（おおわ）岩雄氏が『天武天皇論』（大和書房）で述べた、大海人（おおあま）皇子（天武天皇）と母の皇極（斉明）天皇が前夫・高向王との間で

生んだ漢(あや) 皇子が同一人物であるという説を肯定的に紹介しました。今回は大和説の問題点と、私の捉え方を紹介します。

大和説の問題点についてですが、第一に、大和氏は、天智天皇と天武天皇をめぐる日本書紀のウソには鋭く切り込んでいますが、舒明天皇以前の日本書紀の記述には無批判です。天智、天武に至る近畿天皇家の系図と万世一系の日本支配の歴史そのものが日本書紀の創作である点に考察が及んでいません。第二に、大和氏は、『天武天皇論』の他の部分で、「大海人漢皇子(天武)は乙巳の変にも大化の改新にも中心的に拘わっており、その言動は中臣鎌足の言動に置換えられている」という仮説を立てていますが、この仮説は論拠の乏しい仮説です。

大和氏は倭国を九州王朝と見做す古田武彦氏の説を、「これは論外」と切り捨てています。そして、旧唐書・日本国伝の「日本の国は、倭国の別の種なり。その国は日辺に在るを以て、故に日本を以てて名と為す。或いは曰く、倭国は自ら其の名が雅でない事を悪(にく)み、改めて日本と為す。或いは云ふ、日本は旧小国。倭国の地を併せる。」という文章の中にある「旧小国」とは壬申の乱における東国軍のことであり、東国軍による新しい国家を「日本」と呼んだという自説を展開しています。しかしそれは、九州年号(最初の年号である善記の建元は五二

二年)の存在と近畿王朝による七〇一年の大宝年号建元という事実を考慮の外に置いていません。又日本書紀・斉明紀に引用されている『伊吉連博徳(いきのむらじはかと)書』にある「大倭(※倭国)が天の報いを受ける日は近い」という文面で示された、白村江の敗戦と王朝交代との関係性を無視した見解です。天智朝と天武朝の交代が「革命的」であっても、それは倭国と日本国の交代の具体的中身とみなすことには無理があると考えます。

ここで、大海人皇子(天武)が若い頃、どこで何をやってきたかについて推測してみます。日本書紀・天武紀は、「天皇はじめ鏡王の娘額田姫王を娶って十市皇女を生んだ。つぎに胸形君徳善の娘、尼子姫を納れて、高市皇子を生んだ。次に穴人臣大麻呂の娘、かじ(かじは木偏に穀)娘は二男二女を生んだ。その一は忍壁皇子という。その二は磯城皇子という。その三は泊瀬部皇女という。その四は託基皇女という」と記されています。大海人が若い頃にもらったとされる三人の妃のうち額田王とかじ娘は出生不詳です。穴人臣は天武紀で初めて出てくる氏であり、筑紫にある宗像神社の官司である宗像氏との関連を考えるとこの三名の妃はいずれも大海人皇子(天武)が筑紫にいた頃にもらった妃であったと考えられます。宗像氏の娘である尼子姫が筑紫で、壬申の乱(六七二)の天武方総大将となっ

た高市皇子を生んだと想定すると、大海人皇子は白村江(六六三)の戦いのかなり前(高市皇子が十五歳で壬申の乱に参戦したと想定した場合でも五年前)から筑紫にいたことが想像出来ます。大海人皇子(天武)が、中大兄皇子(天智)が筑紫に来るよりもかなり前に筑紫にいた人物であるとする、白村江の戦いには中心的な立場で参加していたことが想定されます。更に言えば、白村江の戦いで捕虜になった可能性があります。このことについて日本書紀はいっさい触れていませんが、もし日本書紀が、大海人皇子が唐の捕虜になっていたことを隠したとすると、大海人皇子は白村江の敗戦後唐より引き渡された捕虜のうち、未詳な人物である筑紫の君薩夜麻である可能性が高いと思われれます。

大海人皇子(天武)が漢皇子と同一人物であり、白村江の戦いに参戦して唐の捕虜となり、帰国後に日本書紀に描かれた壬申の乱を起こしたと考え、歴史はどのように変わるのでしょうか。

私が「隠された歴史(29)、(30)」で紹介した、山崎仁礼男著『蘇我王国論』によれば、古事記は敏達天皇の皇后は推古天皇であると記しており、又日本書紀・推古即位前紀に記された推古天皇の略歴「十八歳にして、名倉太珠敷(敏達)天皇の皇后と為る。三十四歳にして淳名倉太珠敷天皇崩りましぬ。」の年齢と

推古紀三十六年の「天皇崩りましぬ。時に年七十五」で計算すると、推古立后の年は敏達紀と五年違う、すなわち、敏達紀では、最初の皇后であり五年後になくなったとされる広姫は、実際には敏達の皇后ではなかったこととなります。そして『蘇我王国論』は、「敏達と広姫の間に生まれた押坂彦人大兄皇子は皇太子ではなく、その子である舒明もその妃の皇極も天皇ではない。すべて天智・天武王系の美化の為に創作されたものである」と結論づけています。

すなわち、『蘇我王国論』よれば、欽明天皇に続く王統は推古天皇で終わっており、それに続く舒明・皇極(斉明)・孝徳は、天皇にはなっていません。舒明と皇極の間の子である中大兄皇子も、欽明天皇家の天皇となる資格をもっていません。一方、本来の天子の王統は宣化天皇の嫡男が那津官家に遷都し、その後倭京(大宰府)を都とした筑紫天皇家(後期九州王朝)に続いています。近畿にいる勢力は、宣化天皇の嫡男が那津官家に遷都した時点で、自動的に筑紫天皇家(後期九州王朝)の臣下となりました。軽皇子(孝徳)や中大兄皇子を中心とするグループは、天皇然として振る舞う蘇我本宗家を倒し、筑紫天皇家(後期九州王朝)の実質的な王権復活をなしたのではないのでしょうか。軽皇子(孝徳)や中大兄皇子は、山崎氏が指摘した架空の天皇系図につながっ

か、知らないが、年金が永久に頼りになるなんて思っている人が多いのには驚く。家のローンにしても年金にしても直ぐに変化するという危機意識がない。為替レートが変化し物価が変動する。インフレが進めば年金は確実に目減りする。あくまで今の状態が続くという幻想で成り立っている。国民から金を巻き上げる詐欺みたいなものだから、年金が目減りしモノが買えない時は必ず来る。せめて家庭菜園ぐらいいはやっていたら少しは助かるが、家族は養えない。

④「大学なんか消えて職業訓練校になる」
いい加減に義務教育なんかやめて、中学までで行きたい奴がいくリースクールにし、高校・大学は廃止し職業訓練校にする。もちろん文系の科目は原則廃止し私塾で対応する。原則、学費は無料とし私塾へは援助しない。卒業証明などは一切発行しない。就職先では半年ほどは見習い期間としてそれ以後は正社員とする。正社員となるまで、生活費を国が援助する。多様な給料制度を廃止し簡単なものにする。



「道をゆく」三九 善光寺

成瀬和之

「女芭蕉の心意気

桑原久子の旅日記から」(七)

三月二六日、桑原久子さんは猿ヶ馬場(ほんば)峠を越え、姥捨(おぼすて)、篠ノ井、川中島を経て善光寺へ向かいます。善光寺の手前に刈萱(かるかぎ)山西光寺があります。

刈萱の物語は広く知れ渡っていて、愛隣の思いをそえられる悲劇である上に、主人公の刈萱は筑前の人だったので、久子さん、宅子さんたちも立ち寄ります。この刈萱寺のことは久子さんの『「荒詣日記」』には省かれています。宅子さんはじっくりお詣りもして、「昔のものがたり」の絵解きを聞いたのでしょうか。宅子さんは次のように詠んでいます。

其坊にて昔のものがたりをききつつ其像をみて、
親と子がかりそめならぬかるかやの寺にあはれの残るかたしる 宅子

この物語のあらすじは次のようです。

筑前、刈萱の荘の領主加藤左衛門重氏は無常を感じて、懐妊の妻を残し、都へ上ります。黒谷の法然上人のもとで剃髪し、刈萱道心と名乗ります。一三年後、妻と、父をまだ知らぬ子が連れ立って会いに行きます。刈萱は高野山に身を隠します。母と子はなおも高野山へ追って行きますが、女人禁制の山なので、母は麓の学文路(かむろ)の宿で待つことになりました。

子の石童丸(いしどうまる)は父を捜して山へ登りますが、刈萱は、我が子と知りながら修道の妨げとばかり、そなたの父はすでに亡くなったと告げるのです。傷心の石童丸が母のもとへ戻ってみると、母は心労のあげくに亡くなっています。少年は再び高野山へとつかえし、父とも知らず刈萱に仏弟子として仕えんと乞います。共に暮して修行に励んでいましたが、やがて刈萱は信濃の善光寺へ赴き大往生を遂げます。石童丸は高野山で師(父)の死を悟り、信濃に

赴きます。親子がそれぞれ彫った地蔵尊は、親子地蔵として刈萱山西光寺の御本尊御開帳仏となりました。・・・という物語です。

西光寺は檀家がないので、江戸時代から、江戸、京、大坂、名古屋へと行って、出開帳を行っていました。かるかや講の人々が絵巻を持ち歩いて絵解きをし、勧進したのです。「善光寺さんへ詣るなら、刈萱道心の塚へまず」という知識が行き渡ることを目指してのことでしょう。

近時、この西光寺の住職夫人が、長いこととだえていた絵解きを復活させました。前立本尊御開帳の準備で多忙な中、刈萱の物語の絵解きを、五〇〇円のお布施で拝聴することができました。大きな掛け軸の一つ一つの場面を羽のついた棒で指し示しながらの名調子の「語り」に夢心地で聞き入りました。宅子さん達なら、石童丸が父と知らず懐かしがる哀れさに、襦袢(じゅばん)の袖口を目に当てていたことでしょうか。

善光寺には参詣者を宿泊させる宿坊が多く、持郡(もちごおり)といって、何国の何郡の人は何々院、と、決められています。久子さんらは宿坊案内所で、「筑前は野村坊」と教わります。

「遠くとも一度は詣れ善光寺 救ひ給ふは弥陀の誓願」(善光寺御詠歌)と謡われる善光寺へ、とうとう久子さんたちも

やってきました。

ところで、善光寺は謎に満ちたお寺です。

善光寺の御本尊、三国渡来の一光三尊（いっこうさんぞん）は、何しろ鎌倉時代からの絶対秘仏で、一般人は拝んだことがありません。七年に一度の御開帳があるかといえ、それは御前立（おまえたち）本尊の開帳だと言います。二〇二二年は、七年に一度の「善光寺御開帳」の年でした。しかし、御開帳で姿を見せる前立本尊は、御本尊の分身として同じ姿で作られた一光三尊阿弥陀仏像なのです。前立本尊も、ふだんは善光寺の宝庫に安置されていて、期間中だけ本堂の内々陣中央に遷され、公開されるのです。

本堂に入ると、他所の寺にはまったく見られない縦長の構造で、本尊壇ははるか彼方にかすんで見えます。外々陣には「妻戸」と呼ばれる能楽の舞台が立ち塞がって、その端に親鸞松という大きな松の生花が立ててあります。これらの意味も成立も全く謎とされています。

それから奥は外陣（板の間）と中陣（畳敷）と内陣、内々陣と続いて正面の本尊壇（須弥壇）の中央には俗人にお木像が三体並んでいます。真ん中が開山本田善光（ほんだよしみつ）、左右が奥方の弥生御前と息子の善佐（よしすけ）です。開山御三卿像（さんきょうざう）の左手が瑠璃壇で、ここに本当の本尊、善光寺如来のまします宮殿（大廚子）があります。本田善光は

この如来にお仕えした身分なのに、本尊壇の真ん中にまつられたのも謎です。いくら開基と言っても俗人である善光の名をとって寺号とする例も、四国讃岐の善通寺があるぐらいで、他にあまり例がありません。

ことに女人の弥生御前が、本尊と同列に、にこやかに座っています。善光寺が女人救済のお寺とされるのも、弥生御前の存在からなのではないでしょうか？

※本堂案内図

五来重の『善光寺まいり』によれば、弥生御前は「善光寺巫女の開祖であり大本願尼上人の前身と考えれば、御三卿にまつられる理由が説明できる」と言います。さらに、五来重の推論によると、「尼上人を善光寺如来のお身代わりとすると、これは伊勢神宮の天照大神にも擬せられる。されば弥生御前は伊勢の斎宮の開祖、倭姫命（やまとひめのみこと）とおなじだということになる」という大胆な説を提示しています。

松尾芭蕉は『更級紀行』で善光寺を次のように詠んでいます。

月影や四門四宗もただひとつ

（仏教は宗派宗門様々あるが、所詮は真如の月の如く一つに帰する。それは宗門を超えて大らかに包含する善光寺さんのたた

ずまいそのものではないか）

善光寺さんは八宗兼字のお寺で、一宗一派に属しません。特定の宗教集団ではないのです。善光寺には、大本願と大勧進という二大グループがあり、前者は浄土宗でトップは尼の「お上人さま」、後者は天台宗で、貫主は「大僧正さま」と呼ばれ、年中行事の法儀も、それぞれの宗派によって別々に行われています。

浄土真宗や時宗も善光寺と関係が深く、既に成立していた善光寺信仰を、その布教に取り込んでいます。

信濃路やしるもさだめず人ぞくる
よしみつでらをよしとたのみて

久子

（信濃路をしている人も知らない人もやっけます。善光寺を良いと願ひ頼みにして）

この歌は「善光寺縁起」をふまえています。

全国に信仰を広めるために伝えられてきた「善光寺縁起」は、絶対秘仏である阿弥陀如来がどのようにして生まれ、善光寺が誰によって、いつ、どのようにして建てられたかを説いたものです。その説話のダイジェストを「善光寺御開帳公式ガイドブック」（令和四年版、二〇二二年）から要約して紹介します。

JR長野駅前に、善光寺の方角に向かって花を捧げる美しい女性の銅像があります。これは善光寺の御本尊・一光三尊阿弥陀如来像誕生にかかわる月蓋（づかい）長者の娘、如是（にょぜ）姫です。

その昔インドの毘舍離（ひしゃり）国に、格式が高く財産を持った長者がいました。名を月蓋といい、如是姫という一人娘を溺愛していました。次第に娘をかわいがることだけに夢中になって仏様への信仰を怠るようになり、ケチで欲深い人間になっていきました。ある時、悪疫が流行し、如是姫も罹患してしまいました。

不治の病に見舞われた如是姫のために、お釈迦様のもとへ命乞いに行きました。お釈迦様は「西方の極楽にいらっしゃる阿弥陀如来様に向かって南無阿弥陀仏と唱えなさい」とおっしゃいました。

月蓋長者は家に帰ると、西方に向かって念仏を繰り返して唱えまじした。すると一尺五寸の阿弥陀如来が現れて光明を放ち、如是姫も、国中の病人も全快したのです。

長者は如是姫の全快に感激して、この阿弥陀仏のお姿をこの世にとどめたいとお釈迦様に相談しました。一番立派な金、閻浮檀金（えんぶだん）で作るのが良いというお

釈迦様の教えに従うと、観世音(か
んぜおん)菩薩と勢至(せいし)菩薩を
伴う一光三尊の姿になりました。
これが、のちに善光寺如来として
信仰を集める仏様です。

この仏様は、インドで多くの
人々を救った後、百済へ渡りまし
た。当時、百済の支配者は月蓋長
者の生まれ変わりの聖明王(せいめ
いおう)でした。深い信仰を持って
いたはずの聖明王は王の栄華に酔
いしれた挙句、再び仏教を信仰す
る気持ちを失って悪行三昧の日々
を過ごしていました。ところが、
お釈迦様が過去の因縁をお話にな
るとたちまち改心し、阿弥陀仏を
宮中に安置して供養するようにな
りました。

その後、善光寺如来の仏様は日
本へ渡ることを聖明王にも告げ、
欽明(きんめい)天皇のもとへ送られ
ました。欽明天皇はこの仏像を拜
むべきか会議を開きました。有力
豪族の蘇我稲目(そがのいなめ)が信
仰すべきだと上奏したので、稲目
はこの仏像を預けました。稲目は
お堂(向原寺(こうげんじ))を建て
て供養しました。日本に悪い病が
流行りだすと、物部尾輿(もののべ
のおこし)はその原因が阿弥陀仏の
せいだとして蘇我氏の屋敷を焼き
討ちにし、仏様を難波の堀江へ投

げ捨てました。

それから数年後のある日、信濃
国麻績郷(現在の飯田市坐光寺(ざ
こうじ))の本田善光という人が都
にのぼり、その帰路で難波の堀江
近くを通りました。すると堀の中
から「善光、善光・・・」と呼ぶ
声が出て、水の中から仏像が飛び
出してきました。善光は仏様を家
に連れ帰り、家の中で一番清潔な
臼の上に安置しました。そのうち
に阿弥陀様が善光の夢枕で「水内
郡(みのちぐん)芋井(いもい)の郷へ
移りたい」と告げたので、長野の
地に移り住み、家の庇(ひさし)の
間に安置しました。

善光には善佐という息子がいま
したが、若くして病死。嘆き悲し
んだ善光が阿弥陀様に相談すると、
阿弥陀様は閻魔(えんま)大王に頼
み、善佐を生き返らせてくれました。
この世に戻る前に皇極天皇(後
の斉明天皇)が苦しんでいる姿に
出会いました。生き返った善佐は、
このことを善光に告げました。善
光からそれを聞いた仏様は皇極天
皇をこの世に返してくれるように
取り計らいました。天皇は仏恩に
感謝し、善光を甲斐守、善佐を信
濃守に任じました。そして善光の
家には阿弥陀如来を安置する立派
な如来堂が建立され、寺の名前を

「善光寺」と名付けました。

こうして善光寺が誕生し、やがて御本
尊自身のお告げにより絶対秘仏となりま
す。

「善光寺縁起」は伝説と仏教伝来など
日本の古代史が混ざり合った不思議な話
ですね。善光寺創建の功労者・本田善光
の家族は御三卿として、善光寺本堂の奥
に祀られています。

「善光寺縁起」とともに「善光寺詣り」
を広めるために使われた説話が「牛にひ
かれて善光寺詣り」です。この説話は次
のような内容です。

むかし信濃の国・小県(こがた)
の郡(こおり)に強欲で不信心な婆
さんが住んでいました。信濃にい
ながら善光寺さんなどお詣りした
こともありませんでした。ところ
が、ある日川で布を晒していると、
突如、牛が現われ、角に白布をつ
っかけたまま逃げて行きます。強
欲婆さんは、大事な布を、と慌て
て牛を追いかけてきましたが、夢中で
たどり着いたところは思いがけな
く善光寺でした。牛の姿はなく、
布は如来さまのみ厨子の前に落ち
ていました。牛は善行寺如来の化
身だったのです。はっと悟った婆
さんは、今さらの如く不信心を悔
いて、それからは善光寺さん詣り

を欠かさぬ信心者となり、ついに
めでたく極楽往生を遂げましたと
さ。

「牛にひかれて善光寺詣り」という昔か
らの言い習わしは、五来重(ごらいしげ)ら
の解釈では「牛」は、「御師(おし)」が訛
(なま)ったのではないかと言われていま
す。善光寺先達が一枚の白布の綱を持つ
て信者の列を引つ張る事例に出会った五
来重は、「牛に引かれて」の白布は「御師
に引かれて」の白布に間違いないと考え
ます。先達の引く布綱すなわち「善の綱」
の事例は、近世初期の寛文年間(一六六
一〜七三年)のことなので、おそらく「牛
に引かれて」の錦絵は御師を牛に漫画化
した可能性が高いと推察しています。

久子さんは三月二八日、「戒壇めぐり」
に挑戦しています。しかも、三度巡った
と言います。「暗闇を突き抜けて光明に至
る」その至福のひと時を、繰り返し味わ
ったのでしょう。

桑原久子さんは、いつもより饒舌に『二
荒詣日記』に次のように書いています。

戒壇めぐりということをして
通夜(よもすがら)いねず。この寺
の事はかねてききしにはまさ
りて、大なることはさらなり。
諸堂のうるはしさ詞(ことば)に
尽しがたし。寺領千石付(つけ)

りとなむ。さて、此寺に詣来る人、日々に増りて限なし。

桑原久子さんは、四〇歳で夫を亡くしています。「戒壇めぐり」では、この暗闇の中で死んだ肉親に会えると言われました。それは半信半疑ながらも肉親の死に会った人の一つの慰めであったのでしよう。

この地下道巡りを、善光寺では「戒壇巡り」と称しています。しかし、授戒(戒律を受けて僧侶になること)の戒壇はないので、地下を回る「回壇」が「戒壇」に変わったものと五来重は考えます。

本尊の厨子(宮殿)をのせた須弥壇(じゆみだん=本尊壇)を善光寺では瑠璃(るり)壇と呼びますが、この壇はもともと本堂の床の上に置かれたものではなく、地下から床上まで壇であったろうと思われま

す。その原型は元善光寺といわれる信州伊那郡、旧麻績村(現在、飯田市)座光寺の地下回壇(戒壇)で見ることができま

す。ここでは、本尊の横から地下回壇に下りると御印文捺しの座があつて、住職はそこに座つて回壇者の額に御印文を捺します。長野善光寺もこれおとなじ構造だったと思われませんが、現本堂が、一六四二年に焼失し、一七〇七年五再建されたとき、天台宗的につつかり変わつて元の構造を失つたのです。長野善光寺の瑠璃壇の下に「極楽の鍵」なるものがある

のは、この御印文座の名残です。おそらくあの鍵の向こうが御印文の座で、御本尊の瑠璃壇もこの地下にあつて、前立(まえたち)本尊だけが床上須弥壇にあつたものではないかと、五来重は推察します。

『善光寺縁起』に見られる死者の魂の善光寺詣りは、善光寺は地獄であるとともに極楽である、すなわち他界であるという他界信仰の表出で、生者の善光寺詣りは生きながら「あの世」へ行き、極楽往生を証明する御印文(いんもん)と阿弥陀如来と血縁であるという血脈(けちみゃく)を頂戴してこの世に再生し、健康な余生を送ろうとするものです。御印文とは、僧侶が参拝者の頭に宝印をおしあてるもので、極楽往生が約束されると言うのです。

したがつて善光寺詣りに葬式で棺を引く善の綱がもちいられるのは意味のあることなのです。

五来重は、「牛に引かれて」は「御師に引かれて」と解釈することができ、それは善光寺の他界信仰を根底に置いてはじめて理解できるものだと思います。

「善光寺和讃」に次のようにあります。
身はここに、心は信濃の善光寺
救はせたまへ 弥陀の浄土へ

これも、死者の身は故郷に埋葬されるけれども、霊魂は善光寺如来のおそばにとどまることをあらわしていると五来重

は言います。

今の善光寺本堂は中世末期から構造が勝手に変えられたようで、この時期に善光寺信仰は変質してしまいました。すなわち善光寺如来が戦国武将の争奪的になつて、甲府から岐阜、三河岡崎、豊橋、逢江浜松、そして再び甲府と転々として、最後は秀吉によつて京都方広寺に移された時期にあたります。そして現在の大本堂は江戸時代に再建され、旧態を一変させています。五来重は、中世のこの寺の信仰から推定すると、内々陣の須弥壇は三等分されて、向かつて左三分の一が善光寺如来瑠璃壇、中央三分の一が善光寺中心とする御三卿壇、右三分の一が聖徳太子壇であつたと考えます。善光寺信仰

の三つの目玉は如来と善光と太子です。如来と太子が手紙をやり取りしたという縁起は、善光の座が如来と太子の中間にあつたことを示すと五来重は推定します。

次に、善光寺本堂の妻戸台に「親鸞松」がなぜあるのか、善光寺と親鸞の関係を考えます。

五来重は、妻子を伴つた親鸞が関東へ赴く途中で、善光寺不断念仏衆の一人になつただろうと推測しています。半僧半俗(非僧非俗)の親鸞や弟子真仏が活動の中心としたのは太子堂や如来堂で、彼らはその主催者であつたとされます。親鸞が善光寺本願として善光寺にかかわつた期間は一二一年から一二一四年の三年間であつたと推測されます。

善光寺信仰は如来信仰に太子信仰を伴い、その如来や太子を背負つて各地を巡り歩いた人々も善光寺の念仏聖で、初期浄土真宗教団の核をなしました。善光寺聖は、北海道から鹿児島までの広範囲に及んで、その足跡を記しています。

近世初頭には浄土宗や浄土真宗に姿を変えていきますが、中世まで遡ると宗派の存在はなく、善光寺念仏聖の活躍が読みとれ、後世の「ほうがん」はその残存形態なのです。

善光寺の本願は後世の「ほうがん」であり、善光寺如来と太子像を背負つて関東一円の村々を巡り歩く、生きた如来でした。したがつて、善光寺の如来聖は仲介者の意味では、善知識ともなります。浄土真宗では極力排除しようとした善知識のみがこれにあたり、親鸞の長子である善鸞が父親鸞から義絶されるにいたつた理由でもありました。

親鸞が善光寺の本願聖人であり、生身の仏なるが故に、庶民の信仰を受ける資格を持ったのです。

親鸞は、こうした庶民信仰に相反するところから晩年の帰京となりました。そして息子の善鸞の秘事念仏(修験道的念仏)という、別途の歩みが生じました。この念仏儀礼が善光寺念仏の基本形態と考えられます。

大部分の日本人が日常的に営んでいる宗教生活——正月や彼岸やお盆に先祖を

まつり、氏神や墓に詣り、願い事があればお稲荷さんや薬師さん、地藏さんの祠にお詣りし、人が死ねば葬式に親戚縁者村人が相集(つど)って念仏和讃をあげるという素朴な行為に日本人の宗教としての市民権を与えたい。五来重は、そう考え、庶民信仰の寺としての善光寺を説きながら日本人の宗教の本質を明らかにしようとしています。複雑な宗教現象を単純な庶民信仰または原始宗教のフアクターに分析して、その原形や本質を明らかにする宗教民俗学の方法です。

五来重は次のように『善光寺詣り』に書いています。

宗教の生命は、「理性」が「発展原理」で物質的文化的幸福を追求するとは反対に、「回帰原理」で精神的平安と不安からの脱却を追求する。そこでは素朴に帰り、無知に帰り、原点に帰り、

原始に帰ることが理想とされるのであるが、先に挙げた庶民信仰と庶民の宗教行為は、この回帰原理の発現にほかならない。

私は宗教を論ずる場合は、まずこの回帰原理の庶民信仰(民俗宗教)を指定する。そして、何故このような信仰と行為に価値があるかを説明するための教理(煩瑣(はんさ)哲学)が「文化としての宗教」——すなわち「空

洞化した宗教」を派生させたものと見ている。

(中略)

このような原始回帰の庶民信仰はいわゆる「霊場」と呼ばれる神仏合体の社寺にのこっていたが、それも神仏分離の結果すくなくなつた。そのようななかで善光寺は高野山とともに、その影響を受けずにのこつた数少ない霊場である。そのほか各地に小規模の霊場があるけれども、善光寺ほどに庶民信仰の集積した霊場は見られず、また歴史的にもその変遷を追及できる寺はない。しかしさきにも述べたようにこの庶民信仰は近代文明の思想と生活のなかで理解し難いものとなり、いわば謎としてこのこされたにすぎないのである。

五来重は、既成宗教に対しては、自己を律するには理想主義を掲げ、利他の濟度は庶民信仰に順応し妥協すべきだという提言をしています。

『東路日記』の作者である小田宅子さんは、かの俳優高倉健の五代前のご先祖さんだといひます。善光寺さんに親しみを感じる要素が何と多いことでしょう。往年の名スター、高倉健は江利チエミと結婚したのですが、江利チエミの

起こしたトラブルから離婚のやむなきに至ります。その江利が四五歳の若さで不慮の死を遂げます。高倉健は葬儀には顔を出さなかつたのですが、江利チエミの命日には毎年、墓参りを欠かさず、花を手向け、本名を記した線香を送つていたと報道されています(二〇一四年ニッポン放送)。また、高倉健は、鎌倉市に江利との間の水子を弔うための水子墓を建立し、折に触れて訪ねては静かに手を合わせていたと言ひます。

高倉健は『あなたに褒められたくて』(一九九三年集英社文庫)で「なぜそこまで善光寺なのか。自分のこだわりが不思議であり、おかしくもあり、自分で自分の気持ちをはかりかねていた。」と書いています。桑原久子さん同様に、先立たれた、かけがえのない人への思いが、そうさせたのかもしれない。

久子さんたちは善光寺さんのお詣りを済ませた後、三月二九日、善光寺道を四里ばかりあともどりして篠ノ井追分の油屋という宿に泊まります。ここは中山道・北国街道の分かれ道です。日光へも七五里、江戸にも七五里です。ここで桑原久子さんが熱心に誘ひます。

ここまで来ておなじことなら、日光へもいっしょにおまいりしまつしよや。みんなで拝みたか。

宅子さんは賛成しますが、早く江戸へ行きたいと、日光組と江戸組に分かれることに一旦はなりました。ところが、翌朝、二手に分かれて出ようとした時、女人の不可思議か、興が乗つてきたのか、局面が一転し四人揃つて日光へ向かうことになります。

俳句

土田 裕

春暁や夢とうつつの行き交ひて
ものの芽の一つひとつに希望あり
遠富士のあるべき方も春霞
春の水堰超へる時煌めけり
コロナなぞどこ吹く風と桜咲く

開帳や不滅の灯の揺れやます
芍薬や散ると見えずに崩れたり
衣更へてみても見せなき人のなく
父母のなき故里や麦青む
せせらぎの高まるほとり露の董

影山 武司

空耳に妻の声して露の臺
指きりで別るる小径花ミモザ
砲撃の鈍き音して春の闇
沈丁花曇りがちなる古都の空
沈丁花郵便受けに文の音
青茎のぼきぼき弾けはうれん草
牧神のまじろむ昼や春の海
白雲の影を斑に山笑ふ
大空へ笑みの弾くる花辛夷
野へ山へ花を訪ねる旅にあり

廃業の茶屋の薨へ飛花落花
四阿に鳩の居並ぶ花の雨
鎌使ふ音の訥訥養花天
つばくろの反転疾し摩天楼
風に跳ね風に吞まるる紋白蝶
藤の花空より零れきたるかな
遠投の掛け声響く立夏かな
木洩れ日の影を濃くして花は葉に
鼈甲の眼鏡の奥の薄暑かな
代掻きの轍を水の走りけり

編集後記

S K 生

編集の不手際で先号では「隠された歴史(54)」を掲載する予定でしたが、編集者が誤って「隠された歴史(53)」を掲載してしまいました。また、同時に「俳句」も194号に掲載された作品を195号に掲載するというミスもしました。そのため、執筆者の了解もいただいて今回「隠された歴史(54)」と「隠された歴史(55)」、および先月と今月に投句された作品を同時に掲載することにしました。読者の皆さんには御理解いただけますようお願い申し上げます。



ヴォーリズ作 駒井卓旧邸



農村川柳選

先頃、豊肥本線清川駅（旧牧口駅）

開通百年を記念して豊後大野農村川柳の募集があり、その選を担当した。「道の駅」が企画主体であった。おそらく川柳などを詠んだこともない地元及び周辺の地域の人たちから、心のつぶやきと思える句がたくさん集まった。「お一人様2句まで」と書いていても百句近くを投句する人もあった。要項を読

んでいないのかと呆れるのではなく、ああ、こんなにも次から次へと思いがあふれて来ることがあるのだ、と改めて思い知ったことであった。

私が選んだ句とその評を、以下に紹介したい。作者名は付さない。

○みんなみな笑顔いっぱい夢市場

「道の駅きよかわ」は、この句のとおり、みんなの笑顔がいっぱいの「夢市場」である。地元の生産者と消費者を結ぶネットワークの要となる市場であり、地元の人々はもちろん、近隣から買い物に来る人、ジオパーク豊後大野を旅する人たちも立ち寄り、笑顔が

交わされる。清川の元気を象徴する句となった。

○出身は清川ですと胸を張り

清川からよその町へ嫁いだ方の句。生まれ育った故郷の地を大切に思い、誇りにも思う心を率直にうたった句である。ふるさとを思う心は、嫁ぎ先で始まった新しい暮らしの中に長年にわたり良く生かされ、今日の日を迎えることができたのだと思います。

○一〇〇〇年の鉄道のどかに一、二両

「牧口駅」開通百年の今日、ローカル線を行き交う列車は一、二両でふるさとの町から町をのどかに走っている。百年の歴史の中で駅は、新しい旅立ちや別れを目撃し、また新しい出会いに立ち会ってきた。鉄道は新しい文化を伝え文明を運んだだけでなく、百年の歴史の中では兵を運び、兵を迎えることもあった。のどかに見える風景の中に、作者は、鉄道百年の来し方行く末をも見ているかもしれない。

○桃源郷真心を込め身土不二

身土（しんど）とは、人間の身体と土地のこと。不二（ふじ）、あるいは仏教用語では（ふに）とは、二つの別のことでなく切り離せないこと。身土不二は、その土地でその季節の旬のものをいただくのが命に一番良いという考え方。心の底から身土不二の暮らしができるふるさととは、生きて行く上で理想郷だとうたう、ふるさとへの賛歌である。身土不二の言葉が難しいが、内容の深い句。

○恋叶う君と僕との出合橋

出合橋と轟橋は清川の名所。大野川水系奥岳川に近接して架かるアーチ式の石橋である。二連アーチの轟橋は、アーチ直径が32・1mで日本一位。単アーチ橋の出合橋（出合橋とも表記）は29・3mで同二位である。二つの石橋が、同じ川のすぐ傍に100mも離れず並んで架かる景観は圧巻である。君と僕との出会いに重ねて、叶った恋を見事にうたい上げている。

心の端に浮かんだ思いを五七五に託すことで、自らの心の在り処を再確認することができる。また、他人の句を

読んで自らの心と重ね合わせることもできる。確かに、

○世の中に度し難いものこのわたしではある。しかし、そんな同じ「わたし」が、ホラホラここにもそこにもいると再確認することができるのもまた、川柳の楽しみ方であろう。